

共同研究プロジェクト

「ESDと国際協力」報告

名古屋中立法大学院人間文化研究所

榎木 美樹・市川 哲  
佐野 直子・浜本 篤史

持続可能な開発のための教育 (ESD: Education for Sustainable Development) の重要性については、一九八〇年代から世界全体で認識されてきたが、二〇一三年ユネスコ総会における「グローバル・アクション・プラン (GAP)」採択以降、二〇一五年に国連サミットで持続可能な開発目標 (SDGs: Sustainable Development Goals) が採択されたことも相まって、積極的にESDを推進していくことが世界各国で共有されている。このような中、SDGsの実現に向け、SDをESDとして展開する視点と手法の開発・普及が急務であり、それを地域の大学である名古屋市が如何に担うことができるのかを提示することが、地域と共に発展し、愛される大学をめざす本学に求められている。

ESDを推進する上で重要な

視点は、事象をワガコトと捉え(問題の当事者性)、自ら体験・実践し(参加型の実践学習)、多様な背景や意見を持つ人々と協働しながら(コミュニケーション)、問題解決に取り組む姿勢である。

しかし、ESDを推進する際の課題としては以下がある。第一に、ESDはグローバルレベルから個人の問題まで視点が幅広く、かつESDの対象も社会教育や企業の人材育成など、持続可能な社会を担うすべての活動を含み、さらに活動分野も環境問題をはじめ、人権、福祉、男女共同参画、多文化共生など多岐にわたる。このような広範なステークホルダー・活動分野群に対する理解およびそれらへの包括的かつ効果的な実践を社会の中で喚起し、また定着させるにはどうすればよいか。第二に、異なる開発観・地域づくり観を有する世代間の交流促

進と相互の学びの機会をどのように設けるべきか。第三に、グローバルな発想を持ちながら地域の視点でSDを実践する主体をどのように育成できるか。第四に、こうした課題を克服する上で、大学という存在の社会的価値や可能性をどう考えるべきか。

このような問題意識の下、国境を越える問題群への個人の取り組みを深化して考察し、市民活動を通じた実践に即した教育方法のさらなる工夫と、個人の気づきを基盤として問題解決に取り組む地域とのネットワークづくりの二点に留意した活動を行うため、本年度、私たちは人間文化研究所共同研究プロジェクト「ESDと国際協力」を実施した。研究代表者は榎木美樹、共同研究者は市川哲准教授、佐野直子准教授、浜本篤史准教授である。このプロジェクト研究は、ESD科目「共生のコミュニ

ニケーション」と連動させて進め、市民と大学の相互交流に基づく市民教育活動促進のため、一二月にマンデー・サロンの形式でセミナー兼ワークショップを開催した。

一、前期ESD科目「共生のコミュニケーション」における試み

本科目はESD科目で、多種多様な人々が共存する方途について考える授業である。持続可能な社会づくりの構成概念のうち、特に「多様性」と「非排他性」に注目し、「グローバル時代の国際協力」というテーマのもと、政府間、他国間、あるいは民間で行われる、国境を越えた援助・協力活動(国際協力)について、「人づくり」と「関係性」を中心にすえた共生的なコミュニケーション形態のあり方を考察する。こうした知的作業を通し、将来、地球共生社会の実現を目指して国際協力や地域創生といった現場で活躍する人材の育成を目的とするものである。

国際協力の中では、東海圏在住のアフリカ専門家である、①武藤一郎氏(一般社団法人「アフリカ協会」の特別研究員で元外務省勤務アフリカ担当・「官」代表)、②浅野晴美氏(AMAAFRICA

代表：「民」代表）を選定した。国際援助競争が激化し、中国が、

ポーターの視点からの実践的試みを学習した。

西欧社会から「ネオ・コロニアリズム（新植民地主義）」との批判を受けながらも国際社会への影響力を強める今日、日本の強みを活かしたアフリカへの協力・援助を

二〇一七年六月二一日（講義としては第一〇回）：日本の国際協力：武藤一郎（一般社団法人「アフリカ協会」特別研究員）。

官民それぞれの立場から実践するこの二名の人選とし、経済的・社会的格差に起因する新たな課題への対応（SDG。目標一、二、一〇、一一、一七）を中心とする取り組みにフォーカスした講義を実施し、学生とのインターアクションを行った。

アフリカの開発について、エリートの捉え方、農業に立脚した持続可能な発展性、中部地域におけるESD活動やサステナ政策の取り組みを中心に講義いただいた。学生からは活発に質問が出たが、特に「グローバル化した現代社会に適応し得る人材」という部分に多くの時間を割いて質疑応答を行った。

さらに、ESDが掲げる持続可能な社会づくりの構成概念のうち、特に「多様性」と「非排他性」に注目して、多種多様な人々が共存する方途について考えるため、LGBT（各セクシュアルマイノリティの頭文字：Lesbian 女性同性愛者、Gay 男性同性愛者、Bisexual 両性愛者、Transgender トランスジェンダー）を事例に取り上げた。

二〇一七年七月五日（第一二回）：対等なパートナーシップ：芸術を通じた共生とコミュニケーション  
A フフリカ編 V 浅野晴美 (A M A A F R I C A 代表)。

SDG。目標五、一一、一六、一七を中心に課題設定した。講師としては久保勝氏（セクシュアルマイノリティ支援のNPO法人ASTA代表）およびLGBT当事者を招き、当事者およびサ

アフリカの現実や課題を概観した後、「私でもできること」を基に、私たちができる交流やコミュニケーションというレベルでアフリカについて考える時間となった。学生にとっては、二週間前の武藤氏（外交関係に携わってきた）の見た・感じたアフリカと、今回の浅野氏（民間交流を軸

に据えてきた）の捉えたアフリカが、同じところもあり違うところもありで、非常によい思索と反省の機会になったことが学生のリアクションペーパーに現れていた。

二〇一七年七月一九日（第一四回）：多様性の尊重と排除：セクシュアル・マイノリティとの共生・久保勝 (B A L L o o n 代表) ASTA 代表理事)

講義を受けた学生は、「LGBTの存在は人口比で一三人に一人」「いないのではなく、見えていないだけ」「性別は四つのカテゴリーの組み合わせでありグラデーション。自分も分類される」という部分に大きな驚き、実感、不安などを感じたようだった。自分たちと年齢の近い講師二名が、目覚めたり関わるようになったきっかけ（ストーリー）を直接聞いたことが、学生たちの中のみならず過去の行動や思いを振り返らせることになったようである。「無意識にでも、だれかを傷つけていたのかもしれない」と記憶をたどる者もいた。一人ひとりの物語を知ること、差別や偏見の打破に非常に有効であり、ESDの第一歩と言える。

二、学生および市民向けのセミナー兼ワークショップ「日本人の異文化コミュニケーション」の開催

二〇一七年一二月二一日、「ESDと国際協力」に関する学生および市民向けのセミナー兼ワークショップ「日本人の異文化コミュニケーション」をマンデー・サロンの形式で企画・運営した。名古屋市立大学・愛知県立大学連携事業としても位置づけた。本セミナーの趣旨は、特定の国または国際協力の現場で生じている事例を取り上げながら、持続可能な発展・開発のあり方と自らがそこに如何に関わっていくかという当事者性の観点を考察するもので、セミナー・コーディネーターとして、アメリカでの学生指導歴一三年以上の経歴を持ち、JICA研修員への講義経験も豊富な、秋田貴美子准教授（愛知県立大学外国語学部国際関係学科。コミュニケーション学が専門）を選定した。秋田氏は、学生時代から渡米し、米国在住経験二〇年に及び、長年日本と米国の大学で教鞭を執り、日本人の人間関係、日本文化、ジェンダーの研究の実績がある。今回は、日本人が異文化（知らない人、知らない文化）に接する時

のふるまいについてお話しいただき、その後ワークショップを行って体験学習ができるように企画した。外国人と接する場合だけでなく、地域ボランティアへの誘いを受けた場合など、さまざまな異文化との接触について考える企画とすることを意図した。式次第は、講師紹介・挨拶（一〇分）、講師によるプレゼンテーション（三〇分）、質疑応答（三〇分）、ワークショップ（三〇分）、まとめ（一〇分）の合計一一〇分で、冒頭と最後の挨拶および締め部分を除く三部構成とした。参加者は、二十七名（内訳：教員七、院生二、学部生一四、市民四）であった。

いつもと違う展開になったものの、異文化コミュニケーションの神髄をみるような大変興味深いセミナーとなった。「日本人の異文化コミュニケーション」と題するこのセミナーは、文字通り、文化の意味合いやコミュニケーションの作法に関して日本人同士であっても容易でないことを学ぶ良い機会になった。ことばとして発せられる言語的コミュニケーションの部分以外に、ジェスターや雰囲気など非言語的要素、ひいては、言外の意味であるところのコンテクストを重視するコミュニケーション

ンアプローチ（つまり「高コンテクスト」）により、場が形成されることを証明したものとなった。質疑応答では、市民を含め多くの質問の手が挙がり、講師が回答することさらに次の質問へ移る熱気ある連鎖がみられた。今回のセミナーは、海外生活が長い、見知らぬ日本人が、日本の文化について話したため、聞か側は幾分防衛姿勢をとってしまい、建設的な質問をする機会を失ってしまったかもしれない。

このような白熱したセミナーはそうそう参加できるものではない。人生に数度しかないかもしれないと思わせるものだった。仕組んでこうなったのではなく、無言の、そうならざるを得ない流れによってこうなった。これぞまさに、言語化できない、日本的、高コンテクストな状況が、「真綿のように柔らかな、しかも非常に強韌な期待」に基づいた「非権力主義的な圧力」となって発現したので。

アメリカの文化人類学者、E・ホールによる「高コンテクスト」「低コンテクスト」がモデルになっている。「高コンテクスト」とは、実際にことばとして表現された内容よりも、非言語的に相手に理解される内容の

方が豊かなコミュニケーションアプローチで、日本語はその最極端な例とされている。非言語メッセージに頼るコミュニケーション方法であることから、「高コンテクスト」なコミュニケーションをとる文化は「察しの文化」なども表現される。

20世紀のアメリカの文化人類学者ルース・ベネディクトは、日本のもっとも特徴のある態度を導くものが「真綿のように柔らかな、しかも非常に強韌な期待」であると指摘している。「ベネディクト一九九八…三二六」。

3 上述したルース・ベネディクトは、例として、日本の親が子に体罰を科することによってではなく、立派に命ぜられたとおりのことをするであろうという平静なゆるぎない期待かけることで親権を行使する状況を「非権力主義的な圧力」という表現で説明した（「ベネディクト一九九八…三二四」）。

### 三．まとめ

本報告の冒頭に、ESDを推進する上で重要な視点は、事象をワガコトと捉え（問題の当事者性）、自ら体験・実践し（参加型の実践学習）、多様な背景や意見を持つ人々と協働しながら（コ

ミュニケーション）、問題解決に取り組む姿勢であると記載した。前半部分で講師を招聘し、話を聞いて意見交換する分には、一般事項として了解され差し迫った問題として表面化されないことであっても、後半のセミナーでは、ワガコトとして指摘されるような事態に直面した際、人は保守的な態度を強化し防衛体勢をとる傾向があり、まさに多様な背景や意見を持つ人と協働することがいかに実存レベルで難しいかを具体的に学ぶ機会となった。この意味において、セミナーは大成功であった。

冒頭に四つ掲げたESD推進の課題について、本件共同プロジェクトの機会を活用し、授業という次世代育成の場を通して効果的な情報伝達とインタラクティブを試み（課題一、二、三）、市民を含むセミナーにおいて大学という場を活用した社会的価値や可能性について模索することができた（課題一、四）。今回得られた成果を今後活かすためにも、グローバルな発想を持ちながら地域の視点でSDを実践する主体をどのように育成できるかという視点で大学の社会的価値や可能性を継続して追求していきたい。

（文責：榎木美樹）

〔参考文献〕

ベネディクト・R・著、長谷川松治  
訳（一九九八（一九六七））『定訳 菊  
と刀：日本文化の型』世界思想社